

か、教職員、地域住民等 190 人余りで、大平館高台、古館高台に避難した地区住民は安全であったが、戸倉中学校や五十鈴神社下の宇津野高台等に避難した住民に多数の死者・行方不明者が出たとのことで、結局この地域（折立地区）の犠牲者は 39 人であったようである（写真 20～写真 22）。

後日になってから考えさせられたのは、図 12 の地図上で見ると、五十鈴神社が津波に囲まれて孤立状態にあったことである。戸倉小学校は津波で完全に水没することになったので、屋外避難が正解であったことは間違いない。当初の目的地は宇津野高台であったが、それも危なくなったので五十鈴神社に避難せざるを得なかったとのことで、そうすると五十鈴神社は最後の砦でしかなかったことになる [5], [21]。



写真 20 五十鈴神社から南三陸町戸倉地区を望む（2013.7.20. 撮影）



写真 21 戸倉中学校の被災状況（2013.7.20. 撮影）



写真 22 戸倉小学校跡地から五十鈴神社への避難路を望む（2013.7.20. 撮影）

4.3 石巻市大川小学校の場合

北上川を河口から 4 km 以上も遡った地点に位置する大川小学校（図 13、図 14）では、津波に対する避難行動をとれないまま、児童 108 人中 74 人、教員 11 人中 10 人という多くの犠牲者を出している。何とも痛ましいことであるが、二度とこのような災害を起こさないためには、ハードとソフトの両面からの津波対策を緊急に準備する必要がある。地震発生から津波襲来に至るまでの学校周辺の状況については、聞き取り調査の結果がいくつか公表されているものの、被災当時の状況を把握できるまでには至っていないようである [22], [23]。石巻市から委託された第三者による大川小学校事故検証委員会 [24] にも膨大な調査資料が蓄積されており、これらの資料が今後の津波対策に有効に活かされるよう望みたい。これらの調査資料の中で特に注目されるのは、大川小学校周辺の金谷

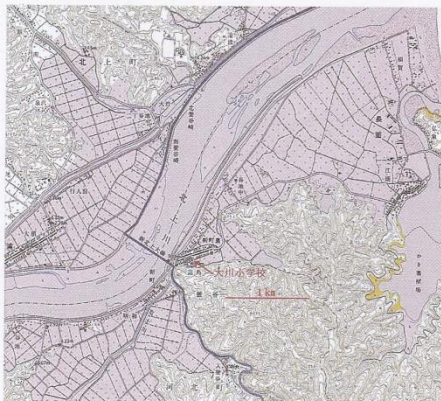


図 13 石巻市釜谷・長面地区の津波浸水分布（原口・岩松 [11] による）



図 14 石巻市釜谷地区の津波浸水分布詳細図（原口・岩松 [11] による）

地区における犠牲者の多さ(図15)であり、住民209人に対する津波の犠牲者が175人(死亡率83.7%)にも達していることである。このことと大川小学校における犠牲者の多さには、恐らく共通の理由が存在するはずであり、図16に見られるように、宮城県の被害想定においてこの地域が津波浸水域に含まれていなかったことと関係があるのではないかと推察される。すなわち、地方自治体の被害想定結果が、本来、防災対策の重要性についての住民



写真23 新北上大橋から見た大川小学校(2013.6.1.撮影)



写真24 津波で押し倒された渡り廊下(2013.6.1.撮影)



写真25 円形校舎1階部分の被災状況(2013.6.1.撮影)



写真26 2階から中庭を望む(2013.6.20.撮影)



写真27 2階から見た渡り廊下(2013.6.20.撮影)

地震の後、段差はあったものの渡り廊下は通れたとの証言が得られている。

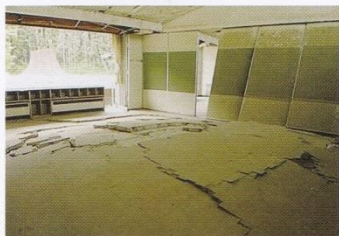


写真28 津波で床面が押し上げられた2階の教室(2013.6.20.撮影)



写真29 1階から見上げた写真28と同一場所(2013.6.20.撮影)
津波の力によって床スラブは梁から引き剥がされている。



写真30 裏山へ登る途中から見た大川小学校(2013.12.21.撮影)